カール・フォン・テイラーの剣

「わー、すごいや」

カールたちの周囲には集結したアルカディア軍がひしめいていた。

「歩兵３０００、騎兵５００、総兵数３５００だそうだ。陣形は今は縦列だが、戦うとなると横陣に切り替わるだろう」

ウィリアムがどこから仕入れた情報を語る。関心した風カールはウィリアムを見た。

「俺たちは軽歩兵。最前列で戦う役目だ。そして――」

ウィリアムは自分たちの背後を見る。視線の先には――

「戦場の花形、重装歩兵が出て来るまでの脇役ってところだな」

重装歩兵。アルカディアとオストベルグ、この二国にとって重装歩兵はまさに花形。主力中の主力であり、騎兵より重要視されていた。基本的に重装歩兵は正規兵であり職業軍人がその兵科につく。それゆえ装備は高性能で統一されたものを支給されており、その戦力は世界中で一目置かれている。

「アルカディアは白を基調とした鎧で、オストエルグが黒だっけ？」

「そうだな。まあこの丘を越えれば、嫌でも目に入るさ」

二人は最前線中盤という位置にいた。二人の所属する十人隊はラコニアでの生き残りを集められた集団であり、生き残った経験を加味されてこの位置に配置されていたのだ。

（基本的に最前線はもっとも経験の浅いものを配置する。俺たちは生き延びた、そして俺たちよりお経験の深い連中の多くは死んだ。故にこの位置。悪くない）

最前列がざわつき始め。おそらく敵軍が視界に入ったのだろう。先導する騎兵や斥候たちがウィリアムたちの横を往復する。この慌ただしさが戦場なのだろう。ウィリアムは自然と高揚感に浮かされる。

（落ち着けよ俺。熱くなったら負けだ。誰よりも頭を冷やして、冷静に事を運ばなきゃ）

「お守りの宝石はしっかり服の内側に隠しておくんだぞ」

ウィリアムは自身を落ち着かせる意味も兼ねて確認する。

「うん、敵に略奪されるのを防ぐためだよね？」

カールは胸の中央に手を当てる。そこには家族から託された大事なものがあった。

「正解。付け加えるなら味方だってその宝石はほしい。何も的だけが危険なわけじゃないさ。とりあえず雑兵が悪目立ちしても意味がないよ」

（ってもいい場面では目立たなきゃ話にならねえけどな）

ウィリアムが思考している最中、

「あっ！？」

二人の眼前に、黒い塊が現れた。接敵するほどのきょりではないが、安穏とできるほどの距離でもない。威勢の良かった最前列はいつの間にかかなりトーンダウンしていた。隣のカールも震えている。それほどの威容。それが軍勢というもの。

（駄目だ。駄目だ俺）

しかしその中で、

（駄目だって、だめだよねえさん！）

唯一逆に熱が高まった者がいた。

その者は、この場で誰よりも苦痛を知っている。泥水を啜って、ドブネズミのように生きてきた。屑と罵られ、ただ生きているだけで迫害された。生きることが罪なのだよ、奉仕するのが当たり前なのだと、そう青年は定義付けられてきた。

「……ウィリアム？」

奪われ続ける人生。ほんの少し前、ようやく奪う側の立場に立った。でも足りない。足りない足りない足りなすぎる。最愛を奪われた。人生のすべてを奪われた。

「笑って……るのかい？」

自身は優位である。強者である自分から奪い去った。その報いをこの世界にぶつけねばならない。姉の価値と等価なものを奪わねば割に合わない。

「いや、笑ってないよ、カール。落ち着いて、俺から必ず離れるなよ」

「う、うん！」

ならば奪おう。この世のすべてを。

「嗚呼ねえさん。有象無象がが蠢いているよ。愚図愚図愚図、愚図の群れ。奴隷と定義付けられた俺よりはるかに劣る劣等種。じゃあ足りないね。あれ全部でも足りないね。僕らが奪われた幸せに比べれば、ゴミの人生なんて足しにもならない」

この場で一番狂っているのは間違いなくこの男である。アルと呼ばれた少年は死に、アルと呼ばれた解放奴隷もまた死んだ。今此処にいるのは――

（さあ、全部喰らってやるっ！）

名前すら奪い食らった名もなき白の獣。

ウィリアム・リウィウスにとって、本当の意味での初陣であった。

「これでいいのウィリアム！？」

「ああ、これでいい」

乱戦である。平原での横陣同士の正面衝突。小細工抜きのぶつかり合い。最初の衝突は騎兵での牽制、そして軽歩兵同士のぶつかり合いに発展。今、両軍中央で軽歩兵が絡み合っている状況である。

その中で、ウィリアムとカールは中盤でまったりと戦っていた。たまに切り込んできた相手と交戰するが、カールに近づく前にウィリアムが軽々と両断してしまい、依然の撤退戦と比べれば明らかにぬるい。

「緒戦で力を入れても死ぬだけだ。前野的だけじゃなく後ろから味方の弓や投槍が降り注ぐ、最前線なんていいことはない。今はまだ適当に流していればいいんだよ。見咎められない程度にな」

戸惑うカールだが、前線に立つリスクは戦果に見合うものにはならない。特に緒戦はあくまで互いの小手調べ。消耗されるのは軽歩兵。緒戦で価値のある首が出て来ることなどない。

（さて、緒戦の矛合わせはそろそろ終わりだろう。どちらが先に動く？）

ウィリアムがこの位置を固持する理由は、戦場全体がある程度見渡せるということ。もちろん視界自体は大したものではないが、危機や動きを感じ取り最適な動きを実行する余裕は充分にある。

（お互い斜陣のような工夫は見られない。ならセオリー通り重曹歩兵でガチンコ、か？）

少しずつこの場に来る敵兵が増え始めた。前線が混じり合い、混戦が広がっているのである。手を打つならばここ。打たぬとしてもそろそろ重装歩兵を動かすとき。

「ウィリアム！後ろが何か！？」

ウィリアムより背後にいたカールの声。遅れてウィリアムも異変に気付く。

「後ろ……騎兵だと！？」

馬蹄の音が聞こえたわけではない。しかし味方の矢が鈍り、前線にも届くほどの怒号がこちらまで届いている。重装歩兵は動きていない。軽歩兵は激突最中、横陣は均衡状態。背後の戦況が動くとしたら伏兵。そして――

（斥候が見通しの良い平原を調べていないわけがない。丘から見通せる範囲に伏兵は居なかった。いるとしたらそれより遠く。丘向こうの森。そして丘向こうの森に待機した兵を開戦後動かし、加えてこちの動きより早く攻め寄せるには騎馬の速度が必須）

故に騎兵。それも相当の速さ、そして強さ。

（先手はオストベルグ。それがおそらく来また。なら……次の手もオストベルグ）

前線の視線すら後方に向く中、ウィリアムは前線を睨みつけた。

（後背を乱した。なら当然次は前ッ）

ウィリアムは前線が動くと見た。実際に、相手の前線がにわかに後退する。しかし押しているのではない。これは、入れ替わり、入れ替わった先は――

「じゅ、重装歩兵！？」

黒の死神。オストベルグが誇る至強の兵たち。

「う、うおっ！？」

咄嗟に味方軽歩兵が槍を投げる。それはまっすぐと黒の鎧に向かい、

「…………」

無造作に盾で薙ぎ払われた。木製とはいえ投げた槍が粉々になるほどの衝撃。

そして特に意に返すわけでもなく、あっさりと軽歩兵をなぎ倒していく重装歩兵。長く太い黒光りする大槍を叩きつけ、ねじ伏せ、轢き殺し、圧殺する。

「た、たすけ」

「退けィ」

太い幹のような大槍が眼前で慄く軽歩兵の頭を押しつぶす。ざくろのように弾ける頭部。前線は一瞬で死地に塗り替わった。血と脳漿、死肉を生み出す黒き死神。オストベルグ重装歩兵。

「やっるぅ」

慄くカールには聞こえないぐらいの声で、ウィリアムはつぶやいた。

「そろそろ、動くか」

ウィリアムが納めていた剣を抜く。抜き放たれた白銀はその場にいた多くの目を引いた。それは剣の美しさでもあり、それを持つ青年の美しさでもあった。

雰囲気が、変わる。

「下がってろカール。良い首が来るまで、軽く雑魚でもちらしておこう」

先程までの無気力っぷりはどこへやら。獲物を前にした捕食者の眼光。ぬらりと、獲物たる黒き死神たちを舐め回すように見やる。

「雑魚、か。でかい口を叩くな小僧っ！」

だがそんなもので怯む重装歩兵ではない。歴戦の武士であり、数々の視線を超えてきた勇士。たかだか一歩兵の戯言。少しくらい雰囲気が異なるとはいえ――

「黙ってかられとけよ雑魚」

「！？」

速、断、首、舞。

「喰らうまでもねえ。プチッと潰してやんよ」

背後に聞こえない声量でささやく。鎧の継ぎ目をせいかくに断ち切られ、首と胴が離れた人間。まだ生きているが、すでに生きる機能はない。言葉を、理解する機能に宙に舞っている。

「馬鹿な！？」

ざわつく前線。味方も、敵も、周囲の視線がウィリアムに集中した。

「我が名はウィリアム・リウィウス！カール・フォン・テイラーの名代にして剣！我が主の威光、恐れぬならばかかってこい！」

この場でカールのことを知るものなどいない。テイラー家でさえ知らないだろう。しかしそれで良い。個々から始まるのだ。カール・フォン・テイラーの影として、剣として、個々が始まり。天を喰らうための第一歩。

「動きが止まっているぞ。重装歩兵。慄いたか？」

「貴様アア！」

虚仮にされた黒の死神たちは白の獣に殺到する。それを高みからし、残らず踏み潰そうと、喰らい尽くそうと、ウィリアムは動き出す。

舞台は整った。